

ゴリラに学ぶ「人間らしさ」 1

NHKラジオ 明日への言葉 2018年6月30日

山極壽一(京都大学総長)

昭和27年東京生まれ、66歳、京都大学、大学院で京大が世界をリードしてきた霊長類を学びました。研究者として主にゴリラをアフリカなど野外で研究され、進化の過程で700万年前人間の祖先と別れたゴリラを通して、生活や社会の由来を探求してこられました。4年前に京大総長に選ばれた際には山極さんを慕う多くの研究者が山極さんに研究の第一戦を離れられると、霊長類学が停滞してしまうと、総長就任には反対の声が上がりました。それほど日本の霊長類学にとっては余人には代えがたい存在となっています。

ゴリラは深夜には寝ていますが、聞き耳を立てています。ひょっとするとラジオの「深夜便」を聞いているかもしれません。(笑い)40年位ゴリラの研究してきましたが、朝暗いうちにキャンプを出て陽が昇るころにゴリラのベッドに到着します。眠たい顔で起きた時に挨拶に行ってゴリラと一緒に過ごします。私一人なので人間の言葉を喋る必要はありません。日柄、ゴリラの様子を見ながらその行動をフィールドノートに書いています、これが私の調査の真髄です。

ゴリラは怖いと思っている人が多いが、**いかドラミングの行動を知っているからだと思えます**美しい顔をして、ドラミングの行動は19世紀の中盤に欧米人に発見された時に、探検家を震え上がらせた行動で、それを見て探検家たちはゴリラは野蛮で凶暴、戦い好きな野獣だと表現してしまっ、100年ずーっと続いて動物園でも鎖に繋がれて孤独な生活を送らされてきましたが、それは大きな誤解だった。

私の師匠の米国人女性博士ダイアン・フォッシーさん、彼女が1967年からアフリカのルワンダやウガンダにまたがるヴィルンガ火山群(4000m級の山々が連なる)に単身行って、自分がゴリラの群れの中に入って、自分がゴリラになってゴリラの観察をしてみると、ドラミングって攻撃的なものではない、色んな意味で使われる行動だと発見しました。わたしも同様にゴリラの群れには行って行って観察して、ゴリラは攻撃的ではないと思うようになりました。

ドラミングはジャンケンのパーの形で胸を打ちます。ゴリラの胸は息を吸うと太鼓の様な役目をします。パーで叩くことによって大きな音が出て、2km四方に渡って響き自分の集団ではない他の集団のゴリラにも聞こえるようになります、遠距離間のコミュニケーションです。近くにいるゴリラにとって見ては**自己主張のディスプレイ**なんです。

ドラミングは9つ中の動作の一つに過ぎません。相撲の動作と同じようなものだと思っています。まず尊居、身体を揺らして、ホウホウと口を尖らせて声を出して、草を掴んでバツとして、二足でたちあがってパカパカパカとして横向きに走って当たりの木を掴んで、大地をパンと叩いて終わります、それが一連の動作になります。二足で立って胸を打つ姿勢が美しい。人間に当てはめた時にこれだと思いました、歌舞伎の見得なんです、おなじ構えだと思いました。

ゴリラと人間と全く見たことも会ったことも無い二つの生き物が、同じ様な姿勢を完成させたということは、社会が男に求めている期待と言うのは、よく似ているのではないかと思ひ当たりました。**戦うものではなくて自分に周囲の注目をひきつけて、自己主張する、それが美しくないといけないう追力がないといけないう。集団と集団同士が出会った時に、リーダーが出てきてお互いがディスプレイ合戦をする訳です。そこでは戦わない。オスは共にメンツを保ったままひき分けることができる。戦ったら勝敗が付くし大げがをするのでそんなことはしたくない。**

そのために**ああいうディスプレイが発達した。闘いを避け威嚇を保つための姿勢なんです。**人間も実は勝敗を付けたいんじゃない、負けたくない、そういう気持ちが人間の社会でもゴリラと同じように作っているのではないかということです。ゴリラには負けましたという姿勢、負けましたという表情も無い。

(猿にはある)日本猿の2頭の処に餌をやると強い猿が餌を奪う。弱い方は歯を剥いて敵意が無いこと、自分の弱さを相手にひけらかす。弱い方がひきさがることによってトラブルを解消する。**(猿の重要な原理)**

ゴリラは負けまいと言う姿勢がゴリラの社会を作っていて、勝とうとする姿勢ではない。日本猿は勝とする社会、必ず勝つものがいて、負けた方は恨みを抱いたり反感を持ったりするので離れていくか、復讐されるかもしれない。勝ち続ければ勝ち続けるほど孤独になって行く。ゴリラ社会は勝とうとしない、負けまいとするだけ、威張る姿勢は出てこない、自己主張をしなければいけない。良い案配で相手、周りが判るように自己主張をしなければいけないというのがゴリラの社会です。仲間を失うことも無い。我々人間はそっちの方にルーツを持っている。

ゴリラ、猿も笑います。ゴリラは笑い声を立てます。(腹を震わせて笑います)人間は口先で笑いますが、あれはだめです。(笑い)腹を抱えて笑うという事をしないといけないう、それがゴリラから受け継いできた人間らしい笑いなんです。人間にも元々は言葉はなかった。長い進化の過程を言葉なしで過ごしてきた、我々人間の感情は言葉のない時代に作られたと思います。

言葉より大切なものが我々のコミュニケーションにはずーっとある訳です。顔の表情、仕草、構えなど、私はそれをゴリラから学びました。人間の脳は1400cc、ゴリラの脳は500cc以下、人間の脳が大きくなったのは言葉(知性)から来たと思われるが、言葉のルーツはせいぜい7万年前位からということが判ってきました。**チンパンジーの祖先と約700万年前に別れて人間は独自の進化を始めました。先ず二足歩行だが、その頃チンパンジーとは変わらない脳を持っていた。それが500万年間続くわけで、その間脳は大きくならず、200万年前にようやく600ccを越えて、150万年掛けて今の脳の大きさになりました。**人間の脳が大きくなったのは言葉をしゃべりはじめたからではないんです。脳が大きくなった結果として言葉を喋るようになったということです。

脳を大きくした理由とは

イギリスのロビン・ダンバーという人類学者、面白いことを発見した。どういう行動、特長が脳を大きくすることに役立っているのか、食べるものなどいろいろ調べてみたが関係なかった、**結果は集団の大きさだった。**脳の中の新皮質といわれる部分が大きくなると脳全体が大きくなる。新皮質が脳に占める割合が高いほど集団の平均サイズが大きいう事判った。